

縁

韓国人祖父がまいた種

題字 武田双雲

詠みつなぎ歌い継ぐ

広島市中区の広島女学院の講堂に今月11日、沢知恵(37)の歌声が響いた。用意した13曲の10曲目、沢は約650人の高校生に語りかけた。

「私の大好きな詩人、茨木のり子さんの歌を歌います」

「わたしが一番きれいだったとき／街々はがらがら崩れていって／とんでもないところから／青空なんか見えた／りした」

茨木のり子は06年に79歳で亡くなるまで、戦中の青春時代や戦後の世のあり方、日々の暮らしを詩に残した。

ともすれば重い詩になるのに、沢がつけた曲は明るい。

「茨木さんの詩は、ひとつも暗くない。ユーモアもスパイスもあって、どんな時代でも希望も笑いもあると教えてくれる」

沢は日本人の父、韓国人の母の間に川崎市で生まれた。2歳で母の故郷ソウルに渡ったが、小学3年のとき、牧師だった父が説教中に軍事政権の批判をしたとして国外退去とめ、再び日本に渡った。

15歳から2年は、父の留学で米国暮らし。再び日本に戻り、東京芸大を卒業後は都内のライブハウスで弾き語りをしてきた。韓国、日本、米国の間で「自分は何者か」と揺れる日々だった。

沢が茨木の代表作「自分の感受性くらい」に出会ったのは、00年のことだ。

「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」

「私のことだ」。頭を殴られたような気がした。

数年後、沢は茨木の著書「ハンブルへの旅」を読んでいて、一節に目を奪われた。

「茨木は50歳から韓国語を学んだ経緯をこう記していた。」

「金素雲氏の『朝鮮民謡選』(岩波文庫)を、少女時代に愛読し……金素雲氏の秘められた抵抗精神を受けとらざるを得なかった。ほぼ40年を経て、彼の詩いた種子が、ひょっこり私の中で芽を出したと言えなくもない」

体中に電気が走った。「やっぱりそうだったのか」

金素雲は沢の母方の祖父だった。「2人にはものすごい批判精神と最上級のユーモアが共通していた」



「次の世代に歌い継ぎたい」と話す沢知恵さん＝中田徹撮影

台に立っていた。熱気を帯びた満員の会場。当時、韓国では日本語の歌を歌うことが禁じられていた。ライブは表向き「金素雲文学の夕べ」。でも聴衆は知っていた。「日本の歌手が歌うらしい」と。

舞台上に立ち、沢は語った。

「今日はぜひ日本語で歌いたい歌があります。でも、許されないから、ら・ら・らで歌います」

沢なりの反骨精神だった。聴衆から声が上がった。「日本語で歌わせてやれ」

それから2年後。日本の大衆文化が開放され、沢は韓国で日本語の歌をうたった最初のシンガーになった。

開放後の歴史的な一曲目は、あの日「ら・ら・ら」で歌った「ころ」という曲だ。訳したのは祖父。沢がゆったりした旋律をつけた。

「わたしのころは湖水です／どうぞ漕いでお出でなさい」

05年、沢は茨木の詩を歌にした。アルバムのタイトルを「わたしが一番きれいだったとき」に決めた。歌が完成すると、茨木に見本のCDを送り、手紙で許可を求めて、最後に書き添えた。

「本の中に祖父の名前を見て驚きました。私は金素雲の孫です」

療養中の茨木から、太い鉛筆で書かれた返事が届いた。

「沢さんが金素雲氏のお孫さんであられたとは驚きでした。十五才くらいで読んだ『朝鮮民謡選』は、今も大好きな本で、これによって朝鮮への眼がひらかれたなつかしいものです」

茨木の訃報が届いたのは、それから半年後の06年2月だった。

昨年末、沢は、茨木の長編叙述詩「りゅうりえんれんの物語」に曲を付け、歌った。

戦時中、山東省で日本軍に拉致された劉連仁氏が、北海道の炭鉱から逃亡して山中に隠れ、13年後に終戦を知らないうちま北海道で発見される。実話を描いた壮大な詩だ。

歌いきるのに70分あまり。1曲で1ステージかかる常識はずれの曲だ。沢は、直前まで歌うかどうか迷った。観客はクリスマスソングを聴くつもりで集まっていた。

思い切って歌い終えたとき、拍手はすぐに起きなかった。しばらくしてはらばらと聞こえ、最後は会場を埋めた。

「3人をつないだ一筋の線が見える」と言う。

東京都西東京市の茨木の家は今もそのままになっている。生前、詩作にふけた書斎の本棚には、茶色くなった金素雲の詩集も並んでいる。

敬称略(宮地ゆう)

祖父は独学で日本語を学び、植民地時代、朝鮮の詩を日本に伝えた。日本語に訳した詩は、北原白秋や島崎藤村に絶賛されている。

沢は幼い頃遊んでくれた祖父を覚えている。ベレー帽にステッキをついた「おしゃれなおじいちゃん」。だが、沢が詩人・金素雲を意識したのは、もっと後のことだ。

96年9月、沢はソウルで舞